英語授業評価の観点

松本青也

Ⅰ．はじめに

英語教育の歴史を辿ると、中世にまで遡る Grammar-Translation Method はともかくとして、1880 年代に提唱された Gouin Method を筆頭に、主なものでも The Direct Method、The Audiolingual Method(Oral Approach)、The Cognitive-Code Learning Method など、実に様々な教授法が華々しく誕生しては、いつの間にか衰退して行った。1970 年代からは Community Language Learning、Suggestopedia、The Silent Way、The Natural Apporach など、それまでの言語教育学を中心とした学問分野を超えた領域から幾つかの革新的な教授法が提唱された。しかし最近では、次から次に誕生するこうした教授法に振り回されることよりも、毎日の授業を学習者にとって最適なものにすることを主眼とすべきだと考える傾向が出てきた。つまり第二言語習得論や心理学、脳科学などの最新の研究成果を取り入れながらも、固有な学習者集団を対象とした授業研究を重ねることで、それぞれの集団に最適な教授法を教師が主体的に案出すべであるという考え方である。

本論は、そうした動向に沿って、大学生による授業研究の成果も参考にしながら、新しい時代の英語授業評価の観点を提案しようとするものである。

Ⅱ．脱教授法

外国語教師の間に脱教授法の動きが出てきたのは、次のような理由による。

1. 提唱される教授法が前提とする状況は理想的なものに一般化されすぎていて、個々の教育現場の具体的な状況に適用することが難しい。
2. 特定な教授法を実践していると主張する教師も、詳しく見てみると実際には直感や経験に頼って、かなり逸脱した方法を採用していることが多い。
3. 同じ教授法でも、教師によってその効果はかなり違ってくる。つまり、実際には教師特有の指導技術や外国語能力、熱意などが成否を決める大きな要因になっており、教授法自体と教育効果を客観的に関連付けて評価することは極めて困難である。
4. 多くの教授法は学習の初期段階ではそれぞれ特色があるが、学習が進むにつれてその区別が困難になってくる場合が多い。
5. インターネットを活用したプロジェクト活動のような、新しい多様な言語活動に対応するには、「教授法」という概念は時代後れである。

こうした動向の中で、Brown（2001, pp. 54-70）は、これまでの第二言語習得研究の成果から確かに導き出される原則として、3 領域にわたる次の 12 項目を挙げ、これを外国語教育の普遍的な拠り所とすべきだと主張している。

<Cognitive Principles>

1. Automaticity
2. Meaningful learning
3. The Anticipation of Reward
4. Intrinsic Motivation
5. Strategic Investment

<Affective Principles>

6. Language Ego
7. Self-confidence
8. Risk-taking
9. The Language-Culture Connection

<Linguistic Principles>

10. The Native Language Effect
11. Interlanguage
12. Communicative Competence

彼自身も述べているように（p. 55）、項目の中には幾つかの領域にまたがるものがあって、分類に課題を残してはいるが、この 12 項目自体は、確かに第二言語の教育における原則と言えるものであり、多くはほぼそのまま授業評価の観点にもなる。ただしこれも、やはりある条件の下での原則である。つまり、英語が第二言語として使われる状況で、コミュニケーション能力の養成が究極の目的とされる場合である。日本のように、英語が外国語として学習される状況では、特に Automaticity や Communicative Competence を、どのような学習者を対象とした教育においても自明の原則として決め付けることができるとは限らない。

Kumaravadivelu(2003)も、脱教授法の動きを支持した上で、これまでに出されたどんな特定の言語理論や教授法からも中立なものとして、次の 10 項目にわたる macrostrategies を重視すべきだとしている。

1. Maximize learning opportunities
2. Minimize perceptual mismatches
3. Facilitate negotiated interaction
4. Promote learner autonomy
5. Foster language awareness
6. Activate intuitive heuristics
7. Contextualize linguistic input
8. Integrate language skills
9. Ensure social relevance
10. Raise cultural consciousness

こうした多様な提言も踏まえたうえで、授業評価の観点を設定するとすれば、それはある特定な学習者を対象とした授業が、そもそも何を目的にして行われるのかにまで遡るものでなければならない。つまり、確かな教育理念のもとで、十分な英語能力と指導技術を備えた教師によって行われている授業かどうかを的確に評価できる観点でなければならない。さらに、単に観点を羅列するだけではなく、そのうちの何がより重要なのかを反映したものであることが望ましい。教師も学習者も、そうした軽重は毎日の授業で実感しており、それを反映することができれば、より有効な評価となることができるだろう。

Ⅲ. 調査

授業評価の観点を決めるための参考資料として、筆者が N 大学で行っている「英語科教育法」の授業の受講生 132 名（2003 年度 73 名、2004 年度 59 名）を対象に調査を行った。この授業は

学生がグループを作って、毎回50分の模擬授業を担当し、その後で観察者としての筆者や残りの学生との間で活発な意見交換を行うものである。つまり学生は教師と生徒の両方の立場で授業を体験し、様々なことに気付いていく。確かに本物の教師でも生徒でもないが、それだけにむしろ中高生を経験したたばかりの観察者として、新鮮な視点から期待以上に鋭い指摘が交わされてきた。

すべての学生が模擬授業を終えた時点で行ったこの調査は、自由記述形式で「授業を成功させる10のポイントを挙げ、そのそれぞれについて説明しなさい」というものであった。学生がポイントとして挙げた項目とその人数は以下の通りである。

人数	項　　目
93	生徒主体。発言させる。生徒の参加を促す。生徒との対話がある
79	授業計画や授業準備に充分時間をかける
66	適度に大きい声で、聴き取りやすい話し方をする
61	笑顔で明るく授業をする
53	生徒と目を合わせて話すこと。生徒の反応を見ながら進める。生徒の様子を常に窺う
52	授業のテーマと目標を明確に伝える
48	常に理解したかの確認を怠らない。レベルにあった内容にする
47	単調にならず、多様な活動で授業にメリハリをつける
46	教材に楽しさや新しさを求める
44	生きた英語。自然な例文。自然な意味のあるコミュニケーション。実用的な英語を用いる
41	生徒に100%を求めない。褒めてあげること。生徒の心を傷つけない。自信を持たせる
38	板書を上手に、わかりやすく
37	視覚的・聴覚的な教材を使う
36	英語の楽しさ。英語が使える喜びを味あわせる
34	授業計画に固執せず臨機応変に対応する
33	教師自身が授業を楽しんでいる。教師にやる気がある
28	教師は自信を持つ
26	教師は情熱、熱意を持つ
25	生徒の立場に立って考える。生徒の興味・関心を把握する
22	教師の知識量を増やす
22	初めが肝心。あいさつ、興味ある話題でスタートからひき付ける
21	時間配分をしっかりする
19	生徒が自ら考えて答えを見つけ出せるように材料と時間を与える
19	教師の人間的魅力
17	欲張らない。授業内容を絞る
17	可能な限り英語で授業
16	面白い雑談ができる
16	英語の文化を学ばせる
15	指名の仕方に注意
14	文字の前に音声

14	説明を分かりやすく
13	正しい発音をさせる
13	生徒との信頼関係を築く
13	授業のまとめ、復習を明確にする
12	先生の発音がいい
12	身近な題材を使う
12	生徒同士で作業させる。ロールプレイ
9	生徒の中に入っていくこと。机間巡視
8	指示を明確に与える
8	翻訳をしない
7	習ったことをアウトプットする癖をつける
7	英語と日本語の違いを示す
7	生徒がリラックスできる雰囲気を作る
6	文法は最後に簡単に、帰納的に展開する
6	英語を生活に取り入れ、英語にさらされる方法を教える
6	生徒の一人一人のことをよく知る
5	ネイティブの先生に加わってもらう
5	授業の反省をする
5	文法説明はする
5	プリントなどの副教材に工夫を
5	4技能のバランスをとる
5	生徒に授業評価をしてもらう
5	英語の歌を聞かせる
4	満足感を与える授業
4	教師に海外経験がある
3	文法用語はできるだけ使わないように工夫する
3	生徒の名前を覚える
3	日本語での説明も入れる
3	恥を捨てる。演技はなりきる
3	英語の異質さに気付かせる
2	自然な授業の流れ
2	分からなくてもごまかさない
2	ほどよく教授法理論を取り入れる
2	英語好きにする
2	予習、復習の最低限の目安を提示してやる
2	辞書指導をする
1	初心に帰る
1	ベテランになっても追い求めることを止めない
1	網羅的な授業

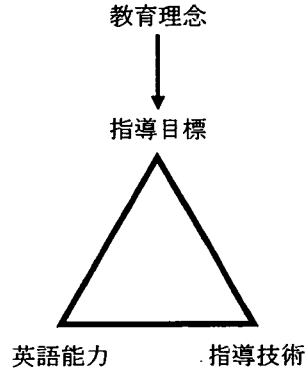
1	競争心を持たせる。
1	なぜ英語を学んでいるのかを理解させる
1	道具に頼り過ぎない
1	生徒の印象に残る授業
1	学習をすることの意義を知らしめる
1	生徒が自分の成長を自覚できるような振り返りの時間を持つ
1	少人数制
1	先生の数を増やす
1	落ちこぼれ予備軍に補足プリント、補習

93 名(70%)が挙げた「生徒主体。発言させる。生徒の参加を促す。生徒との対話がある」という観点は、大学生のような若い世代には特に大切に感じられるようだが、実際インターネットを活用したグローバルなプロジェクトを展開するような場合には不可欠な要素であり、今後益々重要になってくる観点である。79 名(60%)が挙げた「授業計画や授業準備に充分時間をかける」という観点は、指導目標と教材研究の両方に関連するものであり、模擬授業をした学生がその必要性を痛感したのは当然のことである。続く 3 項目の態度や声については、半数近くの学生が指摘しているが、確かにクラス全体の雰囲気に大きな影響を与える要素ではある。

このように多数の大学生が指摘している観点は、英語を学び始めたときに既にインターネットがあった世代の新しい感覚を表しており、観点を取捨選択して順序付ける際の貴重な判断材料となる。

Ⅳ. 授業評価の観点

授業を行う教師に求められるものは、大きく分けて教育理念、英語能力、指導技術の三つであり、そのそれぞれがお互いに関連している。まず、目の前の学習者達に何を与え、何を伝え、何をさせるべきかという教育理念から、毎回の授業での指導目標が決まる。授業での色々な迷いが、実はこの根本の教育理念が定まっていないためというのはよくあることだが、教師自身は案外そのことに気付いていない。教師はまた、教壇に立つまでに教材研究を含めてこの指導目標を達成するだけの英語能力を具えていることが求められる。更に、指導目標に対応した指導技術を身につける必要もある。そして、英語能力と指導技術が表裏一体の関係にあることは言うまでもない。



この三つの範疇別に授業評価の観点を挙げると、次のようなものになる。

＜指導目標＞

1) 指導目標が明確か。

学習者に与えるべき英語教育の理念に沿って、教師がこの授業の目標を明確に捉え、それを学習者にも学習目標として伝えることで、この時間に、何のために何をしようとしているかを明らかにしたい。

2) 指導目標を達成することに教師は熱意を持っているか。

教師が英語教育の理念に共感し、指導目標を重要視できれば、その達成に対する熱意が生まれる。その熱意がなければ、教師の言葉が学習者の心に響くことはない。

3) 指導目標は学習者の実態にあったものか。

学習者の実態を把握していなければ、適切な目標を決めることはできない。クラスの平均的な学習者の学力に応じて基本的な目標を設定することが必要である。

4) 個人差を考慮して指導目標が弾力的に設定されているか。

普通、教室には様々な学力の学習者が混在する。従って全員に同じ目標を設定するのではなく。部分的に最低ここまで、できればここまで、というように、個人差に応じた目標を与えて、すべての学習者が目標達成の喜びを感じられるようにしたい。家庭学習の課題についても同様である。

5) 指導目標を達成するための指導過程は適切なものか。

学習者から出そうな質問や反応なども予想し、頭の中で授業の流れを描きながら、単調にならないように多様な活動を盛り込んだ指導過程の詳細を事前に充分検討したい。

6) 音声から文字、という順序になっているか。

言葉の基本は音声である。指導過程の中でまず初めに音声だけを聞かせる段階があり、しかも学習者にその音声を注意して聞かせる工夫があることが大切である。

7) ４技能の各々の指導に偏りはないか。

学年が進むにつれて、安易な訳読が中心になりがちである。家庭学習も含めて、４技能を均等に育てるように授業を組み立てたい。

8) 指導目標を達成するための教材は適切なものか。

学習者にとって身近で楽しい教材を使って学習意欲を高める一方で、その教材には例文一つにも指導目標が適切に反映されていなければならない。

9) 学習者が規則や用法を推測するのに充分な教材と時間が用意されているか。

学習者が教材をもとに自分で文法規則や語法を推測し、内在化できるように、豊富な教材と充分な時間を与えるべきである。

10) 指導過程に視聴覚教材や教具が効果的に組み込まれているか。

ALT 以外にも、音声や映像を活用することで本物の音声（Authentic Speech）に触れさせることができるし、実際の使用場面を効果的に提示して学習者の記憶を強化することができる。特に題材の文化的背景を伝えるには、映像メディアが極めて有効である。

11) 学習者は自己評価についての情報をすぐに与えられているか。

それぞれの学習者が目標をどの程度達成できたかという情報は、速やかに与えられなければならない。この情報は、本来教師よりも学習者のためのものである。

12) 学習者は教師を評価する機会を与えられているか。

教師は指導目標が実際にどの程度達成できたかを常に自問しなければならないが、授業に対し

て学習者の不満が鬱積しているのに、それが全く教師に伝わらず、いつまで経っても授業が変わらないという状況は珍しいことではない。目標を達成するための改善点に気付くには、学習者に無記名で教師の評価をさせることが不可欠である。

＜英語能力＞

1) 教材の研究が十分されているか。

前時までの既習事項を確認した上で、新しい教材について学習者が抱く様々な疑問に対して、分かりやすく、適切な説明ができるように、教師は充分教材研究をする必要がある。

2) 音声面で教師がモデルになりうるレベルにあるか。

学習者は教師の英語をモデルにするので、教師には英語音声の特徴を正しく学習者に提示する責任がある。教科書付属の CD などを利用して、音素、ストレス、リズム、イントネーションなど、すべての要素を念入りに練習し、最後には重ね読みができるようにしてから授業に臨みたいものである。

3) 題材の文化的背景についての研究がされているか。

題材そのもの、あるいはその中にある言葉の文化的背景について、学習者の知的好奇心を刺激するような面白い材料を用意しておきたい。

4) 教師は自信を持っているか。

教師は自信を持って教壇に立てるように、毎回の授業に対する充分な教材研究は言うまでもなく、常にコミュニケーション能力を高め言葉についての造詣を深めるように研鑽を積まなければならない。

＜指導技術＞

1) 学習者中心の授業になっているか。

教師からの一方的な情報伝達ではなく、学習者の要望を取り入れ、学習者の積極的な参加を促し、学習者の創意工夫が生かされるような授業でありたい。

2) 教師の態度・音声に配慮がなされているか。

朗らかで、明るく、面白い教師が学習者に一番好まれる。教師が授業を楽しんでいることが、何より効果的に学習の楽しさを学習者に伝える。そうした態度に加えて、声は大きいか、聴き取りやすい話し方をしているか、などにも配慮しなければならない。

3) 常に学習者全体の反応や理解度を見ているか。

学習者に理解してもらうために、常に反応を見て微調整しながら丁寧に授業を進めると、学習者もそれに応えようと積極的に学習に取り組むようになる。

4) 学習者に自信と安定感を与えているか。

不必要な劣等感や不安を抱かせることがないように注意しなければならない。そのためには誤答が大切に扱われ、減点法ではなく加点法で学習者を褒め、励ます姿勢が求められる。学習の雰囲気が和やかで楽しく、学習者が安心して発言し、注意を集中させている時に最も効率のいい学習が行われる。

5) 学習活動に無理や無駄がなく、学習者は生き生きと活動しているか。

静かに授業を聞いているようで、実はそれは無関心の沈黙ではないか。活発に活動しているようで、実はそれは無秩序な混乱ではないか。静かだとか騒がしいとかいう現象にとらわれず、学習者が実際に今何を習得しているのかを見極めたい。

6) 学習者の興味・関心やその場の雰囲気にあった指導か

ゲーム一つとってみても、興味を引くかどうかは学習者の興味・関心や精神年齢、その場の雰囲気などに左右される。臨機応変に指導法を取捨選択できるようにしたい。

7) 意味のあるコミュニケーションが行われているか。

教師と学習者、あるいは学習者間でのコミュニケーションは、相手の応答が事前に分かってしまっている「コミュニケーションごっこ」ではなく、情報をやり取りする必然性のあるコミュニケーション、更には学習者自らがどうしても情報を得たい、伝えたいと思えるようなコミュニケーションになるように工夫したい。

8) 導入が十分に工夫されたものか。

新出事項の導入には様々な工夫が求められる。既習事項と対照・関連させたり、図表を活用したりしながら、分かりやすい導入を心がけたい。

9) 黒板を合理的に利用しているか。

全体の構成、カラーの使い方、いつ書き写すかの指示など、板書の仕方にも注意を払うべきである。自分が書いたものを一番後ろの席から見てみるのも参考になる。

10) 音声に常に意味が伴っているか。

学習者が音読する場合、単語を正しく読むことが精一杯で、意味を全く考えず、その後で訳をする時になって初めて日本語で意味を考える場合が多い。喋らせる時も聞かせる時も、文字ではなく絵を見せたりしながら、英語の音声イメージが概念や状況と常に直結するように工夫したい。

11) 英語と日本語を適切に使い分けているか。

Classroom English や Oral Introduction など、英語が使えるところはできるだけ英語を使い、英語では曖昧にしか伝わらない場合には日本語を使うなど、英語と日本語を適切に使い分けたい。

12) 指示は的確に行われているか。

学習者が常に今、何をすればいいか分かっているように、的確な指示を出すことが授業の流れをなめらかにし、学習者の注意を集中させる。

13) 質問は適切になされているか。

質問が当事者間だけのやり取りになってしまうことが多い。学習者全員の注意を引くように、まず全体に問いかけ、そして個人に聞くという順番を原則とする。

14) 時間の配当は適切か。

すべての活動に十分な時間をかけることは不可能である。思いがけなく時間を取られそうになることもある。何が一番大切なことかを常に念頭に置き、副次的なものに時間をかけ過ぎないように、臨機応変に対処したい。

15) 学習方法についての情報を与えているか。

予習・復習の仕方、ノートの取り方、単語の覚え方、4 技能それぞれの伸ばし方など、学習方法について的確な情報を与えることで、自ら学ぶ力を育てたい。

16) 学びの機会を増やすための情報を与えているか。

教室を離れても、インターネットなどを活用して英語に触れる機会はいくらでもある。英語学習を日常化するために、具体的な情報を適切に与えたい。

17) 家庭での学習を正しく位置づけているか。

授業でできなかったことを課題として家庭学習に回すことは、外国語学習の場合当然のことである。ただ、その際には課題のねらいを学習者に伝えて納得させた上で、個人差に対応した課題を与えたい。

参考文献

Brown, H. Douglas. 2001. *Teaching by Principles: An Interactive Approach to Langauge Pedagogy*. Longman.

Kumaravadivelu, B. 2003. *Beyond Methods: Macrostrategies for Language teaching*. Yale University Press.

Richards, Jack C. and Renandya, Willy A. (Eds.).2002. *Methodology in Language Teaching: An Anthology of Current Practice*. Cambridge University Press.